中島子玉（三）

1973.7.17

一

『淡窓日記』文化十四年丁丑（一八一七）三月朔に、「月旦評ヲ改タム。益多ニ四級上ヲ加エ、謙吉ニ二級下ヲ加ウ」と記す。謙吉とは淡窓の弟で、のちに清の俞樾から日本の詩人中の大詩と目される旭荘である。淡窓は『懐旧楼筆記』にいう。

文化四年丁卯。余歳二十六。魚町ニ在リ。兼テ桂林園ニ往来シ。業ヲ講セリ。……此歳ノ五月。謙吉生レタリ。去ル乙丑丙寅ヨリ。今年丁卯ニ至ル迄。三弟出生セシカ。二子ハ育セズ。謙吉一人成長セリ。……先妣丙寅ノ兒ヲ孕ミシ時。星ヲ呑ムト夢ミタマヘリ。其頃先考肥前ニ行キテ豪潮律師ニアヒタマヘリ。其事ヲ物語リアリシニ。律師聞イテ。星ハ文明ノ象ナリ。此子必ス文辞ヲ以テ名アラント云フ。其兒死スルニ及ンテ。先考深ク惜ミ、畫ヲ律師ニ与フル時ニ、其事ニ及ヒシカ。律師答ヘテ。文明ノ象空シカルヘカラス。此子必ス又胎ニ投セント云ハレタリ。今年ニ至ツテ謙吉生レタリ。先考是ヲ喜ヒ。……初メハ献吉ト名ケラレタリ。李夢陽ニ象ルノ意ナリトソ。已ニシテ……謙吉ト改メタマヘリ。

李夢陽は「七子」とよばれた明の文壇のリーダーの一人である。

謙吉は、子玉の入門と前後して淡窓の講席に加わり、この年十一歳である。子玉よりは六才年少だった。

四月十日　午後、小陶亭、益多ト小酌ス。（日記）

二十四日　小集。会スル者。麻生伊織、釈恵禅、蒲池久市、三松斉寿、熊谷昇、小関亭、オヨビ益多。酒ヲ酌ミ詩ヲ賦ス。

五月六日　益多、柚木ニ之ク。国語ノ講ヲ休ム。

九日　小集。会スル者。飯林清記、三松斉寿、小林安石、熊谷昇。而シテ益多、塾ニ帰レリ。

十日　益多ヲシテ国語ノ講ヲ起サシム

十一日　翁ニノ疾ヲ得シヨリ、史記ノ講ヲ廃ス。コノ日、益多ヲシテコレヲ起サシム。

十九日　小関亭、家ニ帰ル。

たぶんこのころの作であろう。子玉に次の諸詩がある。

寄関長卿三首（関長卿に寄す、三首）

高人屏迹住荒村　竹樹陰陰晝掩門　水洗塵襟鳴有響　雲浮世事去無痕　詩従幽処情相得　身在閑中道自尊　棲隠已知多歳月　松梢白鶴育児孫

高人　迹を屏して荒村に住す。竹樹陰陰　昼も門を掩えり。水は塵襟を洗いで鳴って響あり。雲は世事より浮んで去って痕なし。詩は幽処に従って情相い得、身は閑中に在って道自ら尊し。棲隠已に知る　歳月多きを。松梢の白鶴　児孫を育む。

映窓山色新晴　簷際残霞尚有声　花似佳人為誰笑　竹如君子使心清　林梢雀噪煙容変　藻末魚驚波暈生　酔夢醒時山月上　白蓮花底啄餘酲

窓に映ぜる山色は新晴を象すれども、簷際の残霞は尚お声あり。花は佳人に似て誰が為にか笑う。竹は君子の如く心をして清からしむ。林梢に雀噪いで煙容変じ、藻末に魚驚いて波暈生ず。酔夢の醒むる時　山月上り　白蓮の花底に余酲を啄ぐ。

湘竹簫疎荷気香　幽人相対在山堂　薬爐有火青煙直　簷鐸無声白昼長　夢裏義黄双枕簟　談中呉越幾興亡　可憐三日君家酒　洗尽従来塵土腸

湘竹の簫は疎にして荷気香ばし。幽人相対して山堂に在り。薬爐に火あり青煙直ぐに　簷鐸に声なく白昼長し。夢裏の義黄　双枕簟。談中の呉越　幾興亡。可憐なり三日　君が家の酒。洗尽す　従来の塵土の腸。

示閑長卿（閑長卿に示す）

西峰壁立任崇崖　雨晴煙霞染客衣　多謝君家好風景　使人三日不思帰

西峰壁立し崇崖を任す。晴を雨けば煙霞は客衣を染む。多謝す君が家の好風景。人をして三日　帰るを思わざらしむ。

閑長卿とは小閑長卿のことで、長卿は『法窓日記』にみえる寺の字であろう。小閑寺は法窓の『入門簿』によれば寛和三年癸亥（一八〇三）二月四日に入門し、日田と同郡の椎之木村の人である。『懐旧楼筆記』文化十四年歳末記事によれば、この年三十歳、舟の法窓より六歳年少で、

子玉よりは十三歳年長の先輩だ。『懐旧楼筆記』文化十一年甲戌（一八一四）

予従来脚肚ノ患アリ。……五月其症発セシニ。……日夜呻吟シテ適セリ。少シモ眠ルコト能ハズ。是ヨリ先キ。小園亭。秋月ノ伽奈磯梁ノ美子ト為ツテ。外科ヲ学ヒタリ。故ニ人ヲ柚木村ニ遣シ、亭ヲ招キテ治ヲ請ヘリ。六七日ヲ経キテ。全快ヲ得タリ。

地図でみると、日田の南約四キロメートル、高瀬川東岸に「柚の木」があり、約八キロメートル、同じ川をはさんで「柚ノ木」がある。いずれも「両峰壁立」する地形のようである。長卿の家はどちらにあったのだろうか。家数はあまり多くなさそうだから、どちらに住んでも、医とはいっても、あまり豊かではなかっただろう。しかし、学問にはげんで、淡窓に学び、さらに倉井南溟・昭陽の塾に学んでいる。

先輩の家をたずねて、子玉はそこに何を見たのか。「身は閨中に在って道自ら尊し」。だがそれだけではなく、花と、花より美しい夫人を見、先輩夫妻の琴瑟相和するすがたを読んだのであろう。義黄とは伏羲・黄帝、ともに中国神話中の皇帝である。

それならば、かれもまた、山村に義黄を夢みようとしただろうか。どうも、そうでもなさそうだ。

日田雑詠贈小園長卿（日田雑詠・小園長卿に贈る）

永城本是絢羅裳　駘蕩丝歌両市中　走馬東從花露落　鬬鶏南里柳煙斜　兼堪遠運肥豊路　衣服相誇浴場風　別有雅人耽嘯咏　新詩爭誦奪天工

永城はもとこれ綺羅の叢。駘蕩たる緒歌両市の中。馬を東隈に走すれば花霧落ち、鶴を南里に驚わす柳燈籠。魚塩遠く運ぶ肥豊の路。衣服相誇る洛陽の風。別に雅人の嘯咏に耽るあり。新詩争って競す天工を尊わんことを

緒市の人家　化して煙と作る。繁絃急管　当年を憶う。青旗に客は酔う蒲萄酒。朱樓（帳ヵ）に風は清し琉璃筵。離宴　歌を尽して夜の短きを愁え、往朝　夢の如く春の還るを惜しむ。

即今　腸は断つ義林の路。新塚累々眼前に満つ（坊は住義林に葬る。焼死者十八人。照蓮寺の住僧）

緒市人家化作煙　繁絃急管憶当年　青旗客酔蒲萄酒　朱樓風清琉璃筵　離宴尽歌愁夜短　往朝如夢惜春還　即今腸断義林路　新塚累々満眼前（坊は住義林に葬る。焼死者十八人。照蓮寺の住僧）

万岳千峯　勢　東に走す。松林合する処　大原宮。雲帰り雁去に仙鶴を養ぬ、風触れて牙旗に画熊躍る。肥筑の山は連なる飛鳥の外。豆隈に煙は湧く晩晴の中。従来この境　詩料多し。

万岳千峯勢東走　松林合処大原宮　雲帰雁去養仙鶴　風触牙旗躍画熊　肥筑山連飛鳥外　豆隈煙湧晩晴中　従来此境多詩料　題得新篇満竹筒

新篇を題し得て竹筒に満つ。

南雅山高翠幾重　朝雲暮霧為容　齊國無主禽相喚　残墨有墓苔自封　当路怪巖蹲似虎　夜池古木伏如龍　旨時冠剣今泥土　時見吏人来納農

南雅の山は高し翠幾重。朝雲　暮霧　誰が為にか容づくる。齊國に主なく禽相喚ぶ。残墨に墓あり苔おのずから封ず。路に当って怪巖の蹲って虎に似、池を夾みて古木は伏して竜の如

し。旨時の冠剣は今は況土。時に見る吏人の求って農を勧むるを。

太住山下路登登。上見観音閣一層　脱策高林声半死　枕流危岸勢将崩　残碑苔蝕八仙塚　幽石雲籠亭夜燈　近吉市人為好事　岑楼築得倚峻嶺　山有酒使所建称八人塚

太住山下路登々。上に見る観音の閣一層。策を脱して高林は声半ば死し、流に枕して危岸は勢まさに崩れんとす。残碑に苔は蝕む八仙塚。幽石に雲は籠む常夜燈。近ごろ市人ひと之に事を好み、岑楼を築得して峻嶺に倚る。山に酒使建つるところの八人塚と称するあり、

寺在山南号岳林　連松囲砌昼蕭森　草鞋無恙長存古　丹券有封伝到今　天女祠開巖角雪　神君廟鎖石門深　啜茶暫倚欄干坐　忽覚風声入小吟　寺有後醍醐天皇御宸翰

寺は山南に在って岳林と号す。連松　砌を囲んで昼蕭森。草鞋　恙なく長く古を存す。丹券封あり伝えて今に到る。天女祠開いて巖角に雪ゆ。神君廟鎖して石門深し。茶を啜って暫く欄干に倚って坐すれば、忽ち覚ゆ風声の小吟に入るを

道侍堂楓尚依然　行客踟躕猶自憐　曾向天廷経一巻　已逢風雪涉三年　院荒施薬名空在　寺去流民功未伝　修竹閉門人跡断　夕陽蘿落聴鳴禽　院中如施薬院既而廃　不得取其宅遂廃

道侍の堂楓なお依然　行客踟躕して独り自ら憐む　曾て天廷に向う経一巻。已に風雪に逢うて三年を渉る。院荒れて施薬の名のみ空しく在り。寺去り流民の功は未だ伝わらず。修竹門を閉して人跡断え、夕陽蘿落　鳴禽を聴く。　院中に如かず施薬院を築き、既にして上に其宅遂に廃す、

多賀城南熊水湯　猶余千体旧禅場　彫甍破去天為翼　木仏安来土作牀　蓮社秋光無客賞　叢

林蒼景所畫翔　欲因野叟尋遺事　一路風煙独断腸　澤田村有千体寺遺跡

多賀の城南　熱水の陽。猶お余す千体旧禅場。彫刻破去して天を屋となす。木仏安れより来り土を林となす。芭蕉の往来　客の歩するなく、鬱林蕭条　鳥の翔ぶあり。野叟に因って遺事を尋ねんと欲す。一路風煙ひとり断腸。澤田村に千体寺の遺跡あり

江上鶴山接鷺洲　扁舟弔古偶来遊　三重跡滅孤鳴夜　百雉城荒葉落秋　一自英雄怨国計　高令永泰入村謳　悲歌唱処偏多感　鳴咽江口激石流

江上の鶴山は鷺洲に接す　扁舟　古を弔し偶〻来ることを遊し　三重の跡滅し孤鳴く夜、百雉の城荒れて葉の落つる秋。一たび英雄の国計を怨りてより、竟に永泰をして村謳に入らしむ。悲歌唱する処ひと之に感多し。鳴へ鳴カ〳〵咽する江口石を激して流る。

江戸新風一世傾　纖尖求巧売虚名　人心有通漢如画　時好無窮動吠声　詩社誰開寒日月　文壇爭建宋旗旌　独憐李杜存遺卷　高韻応令吾党聲

江戸の新風一世を傾く。纖尖　巧を求めて虚名を売る。人心に通ずる漢に画の如し。時好窮まりなくややもすれば声に吠ゆ。詩社の誰か開く唐の日月。文壇は争って建つ宋の旗旌。独り憐れむ李杜に遺巻の存するを。高韻まさに吾党をして賡ぜしむるなるべし。

見るもの聞くもの韻を呼んで詩とならざるなし、といった調子だ。「新詩争って擬す天工を奪うを」は、すでに李賀を読んでその死を悲しのごうとする毒気を語るのであろう。「詩社誰か開く」といい、李杜の唐調に唱和しうるのはわれらのみと、江戸の詩壇をあいてに挑戦するに似た

くちぶり、とうてい隠棲などしておれず、十七歳の少年がそう早く老成するのもおかしなものであろう。

『淡窓日記』にかえり、子玉の名のみえる条を摘記する。同じく五月からである。

二十四日　午後、会ヲ設クルコト例ノ如シ。会スル者。茂。益多。小林安石。三松斎舞。小関亨。熊谷昇。館林清記。夜二更ニ至ッテ散ズ。

六月朔　月旦評ヲ改ム。益多ヲ五級ノ下ニ加ウ。……国語、業ヲ卒ウ。

二日　益多ヲシテ世説ノ難ヲ問カシム。

四日　午時、隈町ノ館林清記ノ家ニ会ス。会スル者。益多。熊谷昇。山田省吾。三松斎舞。小林安石。小関亨。……夜ニ至リテ家ニ帰ル。是ヨリ先、坊人譽ヲ坊ル。数日（俗ニ中途ト称ス）コノ日、事ヲ卒ル。

荒筆のまま掛塾していたのだ。この日の会合は左官に追い出されてのそれだったのだろう。淡窓は病気が常態というような人だが、このころ家族親戚にも病人が多い。

十日　楼上紙障成ル。酒掃シテ様ヲ施ス。詠月ヲ変ル。清蓉、益多。伯崇、亮三郎ヲ拉シ大原山応神廟ニ至ル。帰路、宮太夫稲荷ノ祠ニ謁シテ帰ル。

十三日　午後、合谷義策。益多ト。韻ヲ分チ詩ヲ賦ス。

二十日　書ヲ晒シテコノ日ヲ卒ウ。……申時、益多。亮三郎ヲ携エ。渡里村ニ之ク。路ヲ失イ榛莽裡ニ入リ。頗ル困疲ヲ覚ユ。帰路、花月水ヲ渉リ、西門ニ家ニ帰ル。

二十四日　午時、益多ヲ携エ隈町ニ赴ク。……既ニシテ方山元台ノ隠家ニ集ル。家モト名ナシ。仮ニ名ヅケテ水明亭トナス。熊谷昇ヲ地主トス。会スル者。鎗林清記。釈恵祥。浦池久市。完吾。夜ニ入ッテ晴ル。……未ダ家ニ到ラザルニ雨ニ遇ウ。

この日の会は『懐旧拙筆記』によれば、詩会であった。「地主」は主催者というほどの意。この月の月旦評で想花は二級上となっている。

七月八日　作詩課程ヲ定ム。（一月十五首ヲモッテ課ト為ス。過グルアルモ及バザルナカラシムルナリ。ソノ体ハ、古詩一首ナラバ則チコレヲ律ノ二、絶ノ三トミナシ、古ト律トノニハ科ヲ過グレバ則チ可。絶句ヲ作ルヲ多クシテモッテ古律ヲ侵スヲ得ズ。又イワク、我ガ詩ノ未ダ至ラザルトコロノモノニ。ヨロシクコレヲモッテ先務トナスベシ。一ニイワク、篇什イマダ富マズ。二ニイワク、詩体イマダ具セズ。三ニイワク、境界イマダ広カラズ。

これは、淡窓が自らに命じた課題である。弟子ニマデコレヲ強いることはなかったであろう。しかし、淡窓の側近にあった才子子玉は、きっとこの課程をとっておのれにも命じたであろう。この日の子玉の作に次の一首がある。

七日八日夜、夢見亡友田子由、贈予以詩、明日為小祥忌、因書感、（七月八日夜、夢に亡友田子由を見る。予に贈るに詩を以てす、明日は小祥忌たり、因って感を書す）

煌煌河漢影　低在老柳枝　闃吟力已倦　枕書臥空斎　故人悦入夢　顔容変如梅　忽探錦囊底
贈我七字詩　琅琅若玉石　語語一何悲　酸来無所覓　虫声続柴扉　来者日或親　往者不可追

交遊如昨日　死生嘆介離　以此悽愴感　況及小祥時　起吟夢中語　双涙潸沾衣

煌煌たり河漢の影。低くして老柳の枝に在り。閑吟力めて已に倦み、書に枕して空斎に臥す。故人　恍として夢に入る。顔容　瘦せて梅の如し。忽ち錦裳の衾を探り、我に七字の詩を贈る。琅々　玉石のごとく、諸々　一に何ぞ悲しき。酬め来って見るところなし。虫声　柴扉を繞る。求る者は日びに或いは親しきも、往きし者は遥うべからず。交遊　昨日の如く、死生　介離を嘆ず。此の悽愴の感を以て、況んや小祥の時に及べるをや。起って夢中の語を吟ず。双涙　潸かに衣を沾す。

『洪恕日記』

九日　実二古田子由（豪作ノ字）ノ小祥忌辰ナリ。悽愴ノ感ニ堪エズ。素餐ヲ祭ニ供ス。益多ヲ以テ賓トナス。……午後、諸子来会スルコト例ノ如シ。小閑亭。熊谷昇。児玉茂。釈恵禅。蒲池久市。館林清記。三松斉寿。及ビ益多。

二十四日　午時、新宮ニユキ茂ノ宅ニ会セントシ。益多ト往ク。雨甚シ。既ニ至ル。館林清記。熊谷昇。先ズ在リ。三松斉寿。僧恵禅。蒲池久市。後ニ至ル。飲酌シテ夜ニ至ル。家ヲリ大恵、普該茂シテ来迎セシム。予ハ乃チ益多ト先ニ帰ル。茂ハ送ッテ村口ニ到ル。途中、雨マタオコル。流潦路ヲ没シ。頗ル困シム。

八月九日　コノ日、蒲池久市ノ宅ニ会スルノ約アリ。故アリテ果サズ。因ッテ艸堂ニ会ス。会スル者。茂。益多。熊谷昇。僧恵禅。久市。三松斉寿。館林清記。夜ニ至ッテ散ズ。

十五日　放学。手島久右衛門過訪ス。茂モマタ会タマ至ル。因ッテ二子及ビ益多ト小酌ス。時ヲ移シテ散ズ。夜、楼ニ上ッテ月ヲ眺ル。月色清亮。殆ド纖翳ナシ。暁ニ至ッテ偶タマ起クレバ。則チ淡雲四モヲ蔽エリ。タダハナハダシクハ暗カラザルノミ。

この夜の淡窓は、弟子張籍らとともに秋の月をみた感懐を追想したのであろうか。かれの日記には、あの文豪の詩と相通ずる趣がある。

十七日　午時マサニヤ田ノ浦池久市ノ宅ニ会セントシ。益多ト出デ。スナワチ道ニ長善寺ヲ過リ。住持ノ僧ヲ訪ウ。茂マズ在リ。因ッテ茂。玄海。恵禅ヲ拉シ同ジク往ク。既ニ到ル。久市ハ門ニ候ツ。父母ト妻ヲ見ル。幾バクモナク。熊谷昇、完吾ヲ携エテ至ル。最後ニ小関亨至ル。飲酌シ。月ノ昇ルニ到ッテ暇ル。既ニ二更ナリ。亨ヲ留メテ塾ニ宿セシム。

『懐旧楼筆記』のこの日のところに、次のように記す。

ヤ田久市カ家ニ詩会アリテ。赴ケリ。久市数年来。交ヲ納レ。詩社ニ入ル。又時々来ッテ講説ヲ聞ケリ。然レトモ。其家隔タリタルヲ以テ。往イテ訪ハズ。此日始メテ往ケリ。益多従行セリ。予ガ居ヲ去ルコト。三十丁程ナリ。……予、律詩三首ヲ得タリ。曰ハク。

望嶺疑無路　穿林得一村　遥知斎木処　可是逸人門　秋蕈豆蔻角　無托笑石根　春深桃発日
定似武陵源

嶺ヲ望ンデ路ナキカト疑イ、林ヲ穿ケテ一村ヲ得タリ。遥カニ知ル斎木ノ処。是レ逸人ノ門ナルベシ。秋蕈ハ蒼苔ニ垂レ。寒花ハ石根ニ笑エリ。春深ク桃ノ発ク日、定メテ似ン武陵源。

童子応門待　華筵粲已張　障屏開古画　簾幕散幽香　美酒何辺買　珍肴風所蔵　刘君成一醉
恍惚是仙鄉

童子　応門　待チ、華筵　粲トシテ已ニ張ル。障屏　古画ヲ開キ、簾幕　幽香散ズ。美酒ハ何レノ辺ヨリ買イシヤ。珍肴ハ風ニ蔵ズルトコロ。君ニ対シテ一酔ヲナス。恍惚コレ仙鄉。

夜深過隘口　奇景役詩魂　線続羊腸転　陰沈虎穴昏　管杉時合影　微月忽無痕　石仏巌頭立
迎人似欲言

夜深クシテ隘口ヲ過グ。奇景　詩魂ヲ役ス。線続トシテ羊腸転ジ、陰沈トシテ虎穴昏シ。管杉ハ時ニ影ヲ合シ、微月忽チ痕ナシ。石仏巌頭ニ立チ、人ヲ迎エテ言ワント欲スルニ似タリ。

石の第三首を「才田茂帰」として「遠思楼詩鈔」巻二に収める。このとき子玉はつぎの四首をのこしている。

逆浦池子良宅（浦池子良の宅に逆ぶ）

霜落千山秋気清　高吟携酒遠迎随　隔山吾覓尋盟日　喜及先生起病時　煙擁疎林人語隔　路
穿深洞鳥啼遠　行々欲覓幽棲処　五柳門門水繞籬

霜落ちて千山秋気清し。高吟酒を携えて遠く迎随す。偶たま吾が先の尋ぬる盟をせし日に当り、喜ぶ先生の病より起つ日に及びしを。煙は疎林を擁して人語隔たり、路は深洞を穿ちて鳥啼くこと遠し。行き行いて覓めんと欲す幽棲の処。五柳は門を囲み水は籬に繞く。

屏迹江村事耦耕　塵間不享錦衣栄　行感有道雲舒巻　名利無心水浅清　訪友晩帰烟擁野　読

書夜坐月当楹　農余時復招賓客　同賦新詩挙酒觴

迹を江村に屏して専ら耦耕す。壺中に羨まず錦衣の栄。行歩道あり雲舒巻し、名利心なく水
浅清。友を訪いて晩帰すれば畑は野を掩し、書を談んで夜坐すれば月は楹に当る。農余時に
また賓客を招き、同じく新詩を賦し酒觴を挙げん。

小亭地僻絶喧嘩　林斧渓春日欲斜　松上鶴帰雲一朶　岸頭僧立路三叉　談玄且喜人無俗　対
酒寧論生有涯　更約陶家重九宴　清樽相伴醉黄花

小亭地僻にして喧嘩を絶し、林斧　渓春　日斜ならんと欲す。松上に鶴は帰る雲一朶。岸頭
に僧は立つ路三叉。玄を談じて且つ喜ぶ人に俗なきを。酒に対して寧ぞ論ぜん生に涯あるを。
更に約せん陶家重の宴。清樽相伴って黄花に酔わん

残星数点夜将晨　帰馬徐々下水濱　酒得微涼初解酔。詩逢奇境不無神。風寒古渡狐吹火。雲
破空林月逐人。高嘯忽穿深洞出。棲禽驚起繞斜巾

残星数点　夜まさに晨けんとす。帰馬徐徐に水浜に下る。酒は微涼を得て初めて酔いを解き、
詩は奇境に逢いて神なくんはあらず。風は古渡に寒く狐火を吹き、雲は空林を破って月人を
逐う。高嘯忽ち深洞を穿って出で、棲禽驚き起って斜巾に触る。

『懐旧楼筆記』の、この年の記事の末に次の一条がある。

此年秋冬ノ頃。予西子ノ詩ヲ作ル。詩二曰ハク。

長卿博洽士　著作三唐語　幽燕沈雄姿　可以任頑鈍　身棲楷柳林　名揚菁華間

長卿ハ博洽ノ才、美ク三唐ノ語ヲ作ス。幽懸沈雄ノ姿、以テ旗鼓ニ任ズベシ。身ハ楊柳林ニ棲ミ、名ハ蕾華ノ圃ニ播ナリ。

彦国耽佳句　冥搜愛驚人　竜門波底珠　奪為席上珍　寄語謝園子　裏詩聲絶倫

彦国ハ佳句ニ耽ル。冥搜カナラズ人ヲ驚カセリ。竜門波底ノ珠、奪ツテ席上ノ珍トナス。語ヲ寄セテ園子ニ謝ス。詩ルコトナカレ聲ノ倫ニ絶スルヲ。

九嶷跡雖旧　芳蘭有新芽　玉郎俊秀人　咳唾繁成花　白圭枉三復　妙語本無瑕

九嶷跡旧シト雖モ、芳蘭新芽アリ。玉郎ハ俊秀ノ人、咳唾繁トシテ花トナレリ。白圭枉ゲテ三復、妙語モト瑕ナシ。

詩家称別才　我見平川子　鄉冠御風行　飄々不可企　此君有鳳毛　円也何曾死

詩家ニ別ヤヲ称ス。我見ル平川子。鄉冠　風ニ御シテ行ク。飄々トシテ企ツベカラズ。コノ君　鳳毛アリ。円ヤ何ゾ曾テ死セン。

偉哉南溟鳥。翼ヲ養イテ池塘ニ息エリ。人材ハ晩節ニ観ルモ、誰カ中郎ニ抗スルヲ得ン。神駒アルイハ齧跼、鎩羽　王良ニ在リ。

偉哉南溟鳥　養翼息池塘　人材観晩節　誰得抗中郎　神駒或齧跼　鎩羽在王良

長卿ハ亨ナリ。彦国ハ伊織。有台ハ戎。君鳳ハ義作。子玉ハ益多ナリ。五子皆詩ヲ以テ送ベリ。予カ門生ノ中ノ秀テタル者ナリ。時ニ亨年卅。伊織廿六、戎廿三、義作廿一、益多十七十リ。

この詩は『遠思楼詩鈔』巻二に「記同社五首」と題し、各首に注がある。

小岡長卿、抽木邑人。

麻生亦園、居ハ竜門寺ノ瀑布ニ近シ

児玉有台、祖ハ仲矣、号蘭嶼。

劉君愿、平川邑人、兄円、才名アリ、蚤ニ死ス。

中島子玉、家ハ南海ニ近シ。

淡窓のこの詩を、子玉の死後に読み、子玉の後半生をかえりみると、子玉は師のこの詩の正当さを証明するために生き、そうして死んだ、という感じがする。

1973.1.27.

〈叢丛・13〉 唐李商隱 李賀小傳[1] 四部叢刊所收常熟瞿氏所藏舊鈔本

京兆杜牧為李長吉集序[2]狀長吉之奇蹟書世虞之長吉姊嫁王氏者詔長吉之手代補長吉細瑣通眉長指爪能苦吟疾書最先為昌黎韓愈所知[3]所與游者王參元[4]楊敬之[5]權璩[6]實楷[7]為忘年每旦日出与諸公游未嘗得顯然後為詩如他人思量牽合以及徑限為愈極從小奚奴騎疲驢[8]背一古投錦囊遇有所得即書投囊中及暮歸太夫人使婢受囊出之見所書多輒曰是兒嘔心始已耳上燈與食長吉從婢取囊研墨搨紙足成之投代囊中非大醉及弔喪日率如此過亦不復省[10]王楊輩時復來探取寫去長吉往往獨騎往還京洛所至逢時有著隨弃之故沈子明家所餘四卷而已[11]長吉將死時忽書見一緋衣人為赤虬持一版書若太古篆或霹靂石文者